おひさま通信

認められる喜びを実感し自信に

＊ケアホームサンライズ＊

松幸さんについて

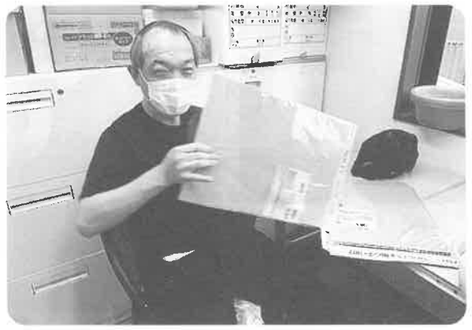
松幸さんは、サンライズ（グループホーム）で生活しながら、日中は白岡太陽の家にじで洋菓子を宣伝する仕事や古紙の分別、畑作業をして働いています。

幼少期から家庭での養育が難しく、養護学校時代から元教諭のもとに身を寄せながら、生活していました。みぬまを利用する前は、友人と、放浪・金銭のトラブル・喧嘩を繰り返す生活を送っていました。サンライズで暮らす前は太陽の里（入所施設）で暮らしており、なかなか集団生活に馴染めず、「早く里を出たい」「ホームで暮らしてみたい」とよく言っていました。にじで仕事をしていく中で、周りの人にも目が向くようになり、一緒に働いている他の仲間の働きぶりをみて「自分もあの仲間のように出来るようになりたい」という憧れをもち、やがてそれが強い目標へと変わっていきました。

太陽の里での取り組み

松幸さんの想いを受けて、自活訓練をスタートさせました。まずは、ホームでの暮らしをイメージする為に、生活リズムの見直し、掃除洗濯、身の回りのこと、時間を意識できるようにスケジュールづくりをするなど職員と一緒に取り組んできました。

少し職員から離れた環境を作った場面では、不安が大きくなり発作も増えたことで「やっぱりホームは諦める」と話していました。ですが、仲間の存在、応援してくれる職員たちがいる事で「やっぱりホームで暮らしてみたい」という想いにたちもどることが出来ました。こうして一歩進んで二歩下がることを繰り返し、



職員と一つ一つ時間をかけて、悩み、考えていく中で、松幸さんはホームで生活をしたい気持が大きくなっていきました。

職員は、取り組みを通して、「発作があるから、選択肢が限られているという考え方ではなく、発作があっても、本人の目標の為に」という視点を大切にしていきました。松幸さんは、「発作と共に生きていこう」という考えを職員と共有し、たくさんの励ましに支えられたことで、サンライズでの生活が実現出来たのだと思います。

にじでの松幸さん

松幸さんは落ち着いていれば笑顔が素敵で人に対してとても優しく、思いやりがあります。しかし気に入らなかったり納得できない事にであうと、虚勢を張ったりしていました。

はじめは、松幸さんに対し「不安な事がある時は乱暴な言葉ではなく、会話をして解決していきましょう」と提案しても、自分の本当の想いを言葉にする事が難しく、もどかしさを感じ、「もういい！」と心を閉ざしてしまう姿がありました。次第に、モヤモヤする事がある度に、「にじ休む、にじ辞める」が口癖となっていきました。そこで、「誇りをもって責任が感じられる仕事をしてもらおう」と、にじの仲間代表として松幸さんにしか頼めない洋菓子の営業電話をする仕事を担ってもらう事にしました。

役割が自信になる

実際の電話では、はじめは原稿通りの棒読みになる事もありましたが、何度も行ううちに、次第に柔軟なやりとりとなっていき、「上手になったね」と相手から褒めてもらえるようになりました。やってきた事が認められ沢山評価してもらい松幸さんの大きな喜びとなったように感じます。以前までの松幸さんは、何かあると「にじ辞める」が口癖でしたが、今では何かにつまづいても、仕事で頼りにされる事が喜びとなり、「にじには松幸さんがいなきゃ」と励ますと、照れたように「仕方ないな」「やるか」と前向きな発言をし、頑張り始める姿が増えていきました。

サンライズでの松幸さん

サンライズでもストレスが溜まると無断外出を繰り返していました。そこで、太陽の里での取り組みのように、職員と一緒に入浴や洗濯、掃除を行うことや、仲間と外出をして好きな物を食べたり、買ったりする経験を積み重ねていきました。このように、本人の気持ちを尊重し、本人と〝一緒に〟取り組むことを大切にしてきたところ、しだいに職員との信頼関係がうまれていきました。

無断外出を繰り返していた頃、「関係ないだろ」、「ほっといてくれ」と言っていた松幸さんが、職員との信頼関係や取り組みの積み重ねから、徐々に自分の事を理解して支えてくれている実感がもてたのか、「職員に迷惑をかけちゃダメだよな」と前向きな言葉を口にするようになってきました。

また、仕事へのやり甲斐を見つけた事で、余暇の取り組みにも変化が見られていくようになりました。外出をして好きなＤＶＤや欲しい物を買う為に、仕事を頑張るという意識が少しずつ生まれているように感じます。お金を使える喜びを感じ、「お金が貯まったら次は何を買おうか」と担当職員と目標をたてる姿があらわれていくようになりました。

そして、松幸さんが時間がある時に描いていた絵画に着目し、仕事として頑張る事を勧めてみました。作品が完成した時には私たちも嬉しくなり、ホームの玄関に飾る事を提案した所、照れた様子もありましたが、それ以上に喜びを感じているようでした。そして、飾る額縁を購入し、定期的に作品を入れ替えるようにした事で、新しい作品が完成するたびに持ってきてくれるようになりました。

認められる喜び

今までは出来る事なら仕事を休みたい松幸さんでしたが、「明日営業の電話するね」と誇らしげに話してくれるようになりました。サンライズ職員も松幸さんの頑張りを応援する為、洋菓子販売に来たら購入し、「また頑張ってね」と励ましてきました。職員に評価されたり認められた事が喜びとなり、もっと職員に喜んでもらいたいという気持ちが次第に芽生えたようで、洋菓子を購入しプレゼントしてくれるようになりました。

おわりに

みぬまに出会うまでの松幸さんの生育歴の中では、認められる喜びを経験し実感することが難しかったのだと思います。出会った頃は「俺に近づくな」「どうでもいいだろう」等と傷付くような事も沢山言われ、どのように関わっていいのかわからず不安でいっぱいでした。しかし、松幸さんは、一緒に働き、一緒に考え、一緒に暮らしていく中で、本当はもっと認められ頑張りたいと願っているのだと思えるようになりました。その為には、本人の願いを理解し信頼関係を深めていく事が大切だと考えています。本人が主体的にやりたいこと、出来る事を軸に仕事や生活を組み立てていく。その為の支援であり、その結果、本人が「自分は、どこで、誰と、どのように生きていきたいか」という願いが確立していく事が大切なんだと思っています。

ケアホームサンライズ職員
櫻井　耕平